



全国棚田(千枚田)連絡協議会

棚田ライタラス

第61号 2012.7.25
(年3回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるさやらネットワーク

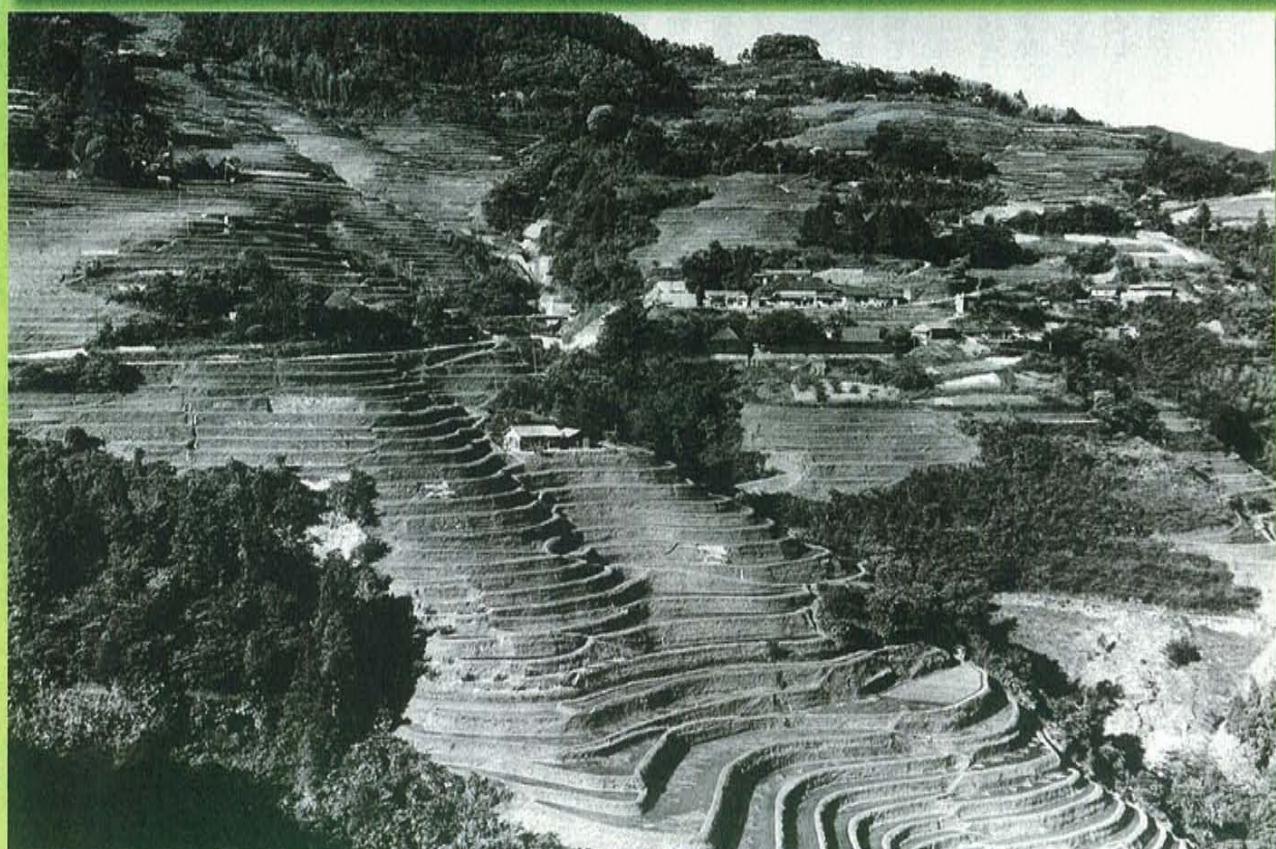
〒184-0004 東京都小金井市本町6-5-3チーム石駒内

TEL:042-386-8355 / FAX:042-385-1180

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

特集・棚田地域で描く活性化ビジョン

特集…岡山県美咲町黄福なまちづくり／熊本県球磨村マラまるごと棚田博物館事業ほか。
取材レポート…和歌山県有田川町沼地区



和歌山県有田川町沼地区、昭和30年～40年代の光景。まさに耕して天に至る棚田の光景も、日本一の生産量を誇るという山椒畑に変わったり、手が入れられなくなったり、また災害被害に遭うなど刻々と変化している。写真上：撮影者：西田圭吾。写真下：昭和42年撮影



棚田地域 で描く 活性化ビジョン

全国各地の中山間地域では、地域の活性化や雇用など仕事を生み出すために、さまざまな活動が展開している。棚田地域では、今どんなビジョンが描かれ、地域はどう動いているのか——。

千葉県
鴨川市

大山千枚田保存会の多岐、多種に渡る活動の展開は、全国の棚田地域の中でもトップランナーといえる。そこにはどんなビジョンがあるのか、寄せていただいた。

NPO法人大山千枚田保存会
理事長 石田三示



写真はすべて大山千枚田保存会の活動の様子

民間からの提案

棚田のある中山間地域のみならず日本各地で自分たちの暮らす地域を元気にしていきたいと活性化に向けた取り組みがされています。しかし、なかなか思い通りにできていないのも現実です。私たちも苦労しながらですが、目的達成に向けて棚田を中心とした中山間地域での活動を進めています。

大山千枚田保存会は平成9年の発足ですが、この活動はその2年前にさかのぼり、国の農業構造改善事業であるリフレッシュユビレッジ事業を鴨川市が取り組んだことに始まります。この事業は故藤本敏夫氏がこの事業の情報を得て、鴨川市に事業主体となつて取り組むよう提案したものです。この事業は農林省の管轄の事業ですが、学校と病院以外なんでもできるという何でもありという触れ込みの事業でした。各県2、3か所の取り組みがあったように記憶しています。

辺の自然や特に棚田を生かせないかということで議論がされました。その中で直売所の計画もされ「みんなの里」を作ることになりました。大山地区では元々の計画である棚田での体験やレストラン、宿泊施設の経営が話し合われました。最終的には体験施設のみになってしましました。今でこそレストランや宿泊施設を運営する力もある程度つきましたが、その時にそれを順調に運営できたか疑問であり、結果的には良かつたと思います。

最初から大風呂敷を広げ大きな施設を作るのはうまくいかなかつたときに大きな負担となります。

民間から提案し、事業を自分たちで熟議の中で時間をかけて作り上げていくことこそ大切で、事業推進の近道であり、また、結果としてとそのプロセスが私たちの財産となっています。

地域の資源と課題の検討

大山地区の取り組みは初めに大山地区協議会として発足し、会員には地域で実際に農産物を販売している人、地域の活性化を図り活動をしている人、地域の代

表の人など広く参加して新しい事業に夢を持ちながら話しかれました。鴨川市の一一番西に位置し、中山間地域であり田畠の規模も小さく農業経営という観点からはネガティブに捉えられ、一番過疎の進んでいる地域でした。しかし、少しずつ増えてきた鴨川を訪れる人たちから棚田の美しさや農村のたたずまいの素晴らしさを聽かされる中で、一條の光を認識し、何かしらの可能性を感じていました。

また、それを守つていく大切さを認識する中で、その保全の難しさが課題として見えてきました。地域の計画として③地区からそれぞれ計画が出され、③か所採択するか、1か所に絞るか議論の末、小金の千枚田（現在の大山千枚田）を中心とする計画に絞られ、その中で取り組む事業として棚田オーナー制度がクローズアップされてきました。

棚田オーナー制度は、すでに高知県梼原町において始まっており、いかに鴨川版が作れるか検討を始めました。大山千枚田では全国の棚田と違うのは耕作放棄が懸念されていたことはあっても、まだ耕作者が営農をしておりました。地主さんは「都市住民が田んぼの作業に来るのは、素人に田んぼの作業なんかできない。オーナーに貸すことによって田んぼがどうなつてしまふのかわからぬ」などいろいろな懸念があり、地主さんの理解が課題でした。

2年にわたり棚田ネットワークの皆さ

んに体験に来ていただき、リハーサルをすることによって理解が深まり、都市住民に、棚田を保全していくことの大切さや農家の皆さんのが頑張りが評価され、オーナー制度の開始時には喜んでオーナーさんを迎えるようになりました。

棚田オーナー制度は、都市と農村の思いがマッチした事業でした。中山間地域では農業者の高齢化が進み、耕作放棄が進み、何とか守つていただきたい。都市住民にどうつては普段食べている食事がどうやって作られているのか本当に安全なのか。できれば自分で作つてみたい。子どもにも体験させたい。でも都会にはそんなどころはない。思いが共有できたのです。

このことは、次の事業展開に向けて大きな礎となりました。

中山間地域での課題は切り口を変えることで都市の課題解決になることを知りました。

また、中山間地域の自然を生かした自然観察会や、農業体験、食育活動も学校校体験も受け入れています。このほとんどが、都市住民との会話の中でヒントをもらつたものです。

また、中山間地域の自然を生かした自然観察会や、農業体験、食育活動も学校

の子どもたちに向けて提案し、多くの学校体験も受け入れています。このほとんどが、都市住民との会話の中でヒントをもらつたものです。

また、中山間地域の自然を生かした自然観察会や、農業体験、食育活動も学校

を育て、糸紡ぎ、織りをし、藍染めをする綿藍トラスト、古民家の再生を通じて大工仕事や日本の住宅について学ぶ家づくりいろいろな形で保存会活動に受け入れ側と体验塾など毎年、新たなオーナー制度の提案をしてきました。

また、中山間地域の自然を生かした自然観察会や、農業体験、食育活動も学校

を育て、糸紡ぎ、織りをし、藍染めをする綿藍トラスト、古民家の再生を通じて大工仕事や日本の住宅について学ぶ家づくりいろいろな形で保存会活動に受け入れ側と体验塾など毎年、新たなオーナー制度の提案をしてきました。

また、中山間地域の自然を生かした自然観察会や、農業体験、食育活動も学校

私たちの活動の最終的な目的は、自分たちの暮らす地域をどう活性化するかということがありました。その手段として地域の自然や人的な資源を生かし、都市住民とのかかわりを持つてきました。その活動の柱には、農の大切さや、安全な食、自然と一体になった循環型の暮らしを伝えることを基本にしてきました。

地域の課題は刻々と変わりつつあり、それをどうとらえ切り口を変え、多方向に切り盛りする知識や技術を持つた人、広報をする人、それぞれのオーナー制度を切り盛りする知識や技術を持つた人、しかし、基本的に高齢の農家の人はいわゆる「百姓」であり、百の仕事をこなしてきた人たちで、何においても知恵と技術を持つていたのです。また、都市住民の中からも協力を申し出てくれる人も現れたり、必要であれば専門の職員も雇いスタッフの充実を図つてきました。

平成15年にはNPO法人化し、対外的にも責任を持つて団体とし、行政から指定管理も受け、スタッフの充実とともに各種補助金も受けられるようになりました。地域が持つ自然的な資源と人的な資源それに加え都市住民の知恵を合わせて活動を広げてきましたと言えます。

そこで生きることを選択した者が地域に誇りを持ちながら豊かな生活が送れるように取り組んでいかなければなりません。本当の豊かさとは何かを考えながら。

各種オーナー制度の開発

活動を広げていくためには、どうつて もかかる人が必要になります。事務や広報をする人、それぞれのオーナー制度を切り盛りする知識や技術を持つた人、

地域の課題は刻々と変わりつつあり、それをどうとらえ切り口を変え、多方向に

から客観的に見つめ本質をつかむことから始まります。日本全体で少子高齢化が進む中、農村部ではより一層極端に進行していくべきでしょう。なかでも人的資源を必要とする中山間地域ではいかにそれを

食べる人がいるかが課題となります。私たちの中山間地域での課題や活動の資源は都市住民と共に持つていかなければなりません。しかもそれを活用した取り組みは私たちの田舎での暮らしに自信と活気を取り戻してくれるのです。

そこで生きることを選択した者が地域に誇りを持ちながら豊かな生活が送れるように取り組んでいかなければなりません。本当の豊かさとは何かを考えながら。

次の年には、複田した田んぼを使い大豆を作り、棚田のお米を使った手作りの麹で味噌を作る大豆畑トラストを始めました。また、大山千枚田の周辺にも少し規模の大きな棚田の活用が課題となり、100戸を一口として参加し、すべてを共同作業で収穫物を均等配分する棚田トラストを、酒米を収穫をして酒に加工して酒で配分する酒造りオーナー、綿と藍

3 The terraced rice field news

平成22年には、岡山県の工芸商品にも認定され、町内外の一般家庭の花壇やピザ窯として、また新築された中学校の校舎に使用されるなど、幅広く活用されています。また「食堂かめつち」前の黄福広場の一角に、黄福のオブジェ「幸せの『あいのす』」がお目見え。県の補助金を受け、黄福のレンガ約5000個を使用して町が制作したオブジェで、幸せなまちづくりのシンボル拠点となつてほしいと願っています。【写真P4下】

第3章 黄短

黄福の黄色いハンカチ

黄色といえば、1977年[1]に上映され、第1回日本アカデミー賞を受賞した映画「幸福の黄色いハンカチ」を思い出します。せんか?

町では、この映画をヒントに美咲町を訪れる方に幸せな気持ちになつてもらおうと、黄色いハンカチでお客様をお出迎え。毎秋開催されている「たまごまつり」では、一日限定で歩行者天国となる「黄福通り」(亀甲商店街)が、ハンカチで黄色一色に染まります。

【第2章 黃福MEMO】

～岡山のまちなかで愛を叫ぼう、
愛を誓おう～

黄福のレンガを活用し作られた幸せの「あいのす」の中にある幸せの黄色いベンチに座り、「キミが好きだ!」(キミ=黄身)と叫んでみよう。岡山県のはば中心で愛を叫ぶことにより、きっと愛が実るはず!?

愛の告白、プロポーズ、誓いなど、愛のスタートラインの場として、皆さんの思い出づくりのワンシーンのお役に立てていただければと願っています。

昨年度行われた町の婚活事業により今秋結婚が決まったカップル。もちろん婚活事業でも、告白は「あいのす。で。末長くお幸せに～

また昨年発生した東日本大震災の復興に対しても、このプロジェクトから「何ができるのか」、「何ができるか」と考え、少しでも被災地・被災された方の「活力」や「元気」に繋がればと、「黄福の黄色いハンカチ」応援メッセージを被災地へ」と題して、町民の方や美咲町を訪れる観光客の方に黄色いハンカチを

巨大なハンカチに縫い合わせて町内に展示するなど、「町」は着々と町民の手によつて「黄褐色」に染められていくます。最近では、老朽化に伴う解体前の中学校の校舎に在校生、卒業生らが、校舎への感謝の気持ちや学生生活の思い出などを書き込んだ黄色いハンカチを屋上から飾り、その光景はまるで映画のワンシーのようでした。【写真右下】

また、町内の小・中学生約1300人が、黄色いハンカチ一枚一枚に「甲子園に出場」、「保育士になりたい」など、将来の夢や願い、家族への感謝の気持ちを書き込み、それをボランティアの皆さんのが、

巨大なハンカチに縫い合わせて町内に展示するなど、「町」は着々と町民の手によつて「黄褐色」に染められています。

最近では、若林作は併用前の中学生の校舎に在校生、卒業生らが、校舎への感謝の気持ちや学生生活の思い出などを書き込んだ黄色いハンカチを屋上から

ハのよひだした。

また昨年発生した東日本大震災の復興に対しても、このプロジェクトから「何ができるないか」、「何ができるか」と考え、少しでも被災地、被災された方の「活力」や「元気」に繋がればと、「黄色いハンカチ」応援メッセージを被災地へ」と題して、町民の方や美咲町

実施期間はわずか1カ月あまりではありましたが、多くの義援金や535枚もの“思い”が集まり、昨年の7月下旬、福島県へ届けてきました。

A photograph of a two-story concrete building with a balcony. A long yellow ribbon banner is draped over the balcony railing, featuring the Japanese text "ありがとう 中央中学校" (Thank you, Nihon Chūgakko) and a red graduation cap icon.

【第3章 黄福MEMO】

大塙和西棚田周辺を巡るウォーキングコース（約5km）は以前から設定されていますが、このハンカチープロジェクトの一環として、「幸せの黄色いハンカチウォーキングマップ」を作成しています。

四季折々の美しい表情を持つ、美咲町の棚田。マップには絶景ポイントやトイレの場所も明記し、毎年行われる棚田まつりでは、多くの参加者が黄色いハンカチで作ったマップを手に思い思いの目的で、棚田を散策しています。

紙で作成されている各種マップは、すぐ捨てられることがあるかもしれません、美咲町のハンカチマップは、普段はポケットやバッグに入れて、ハンカチとしてお使いくださいないとおすすめしています。【写真右】



大併和西の棚田イベントで、
黄色い棚田ハンカチマップを
手にする仕掛け人、川島さん

幸せの黄色いハンカチ
棚田ウォーキングマップ



熊本県
球磨村

「ムラまるごと棚田博物館事業が目指すもの」

熊本県球磨村
産業振興課

球磨村では「棚田博物館事業」を立ち上げた。村内に棚田街道を設定したり、村内全域の棚田を文化遺産として認識し、次世代に伝える活動も。

山岳地帯にある球磨村

球磨村は熊本県の南部に位置し、東西13km南北25km、総面積207.73km²と広大で、その88%を山林が占める山岳地帯にある。村の中央には、日本三急流の球磨川が東西に流れ、川をはさんで700m以上上の山々が聳え、これらの山岳を縫つて大小無数の川が球磨川に注いでいる。人口は、4352人(平成24年6月1日現在)で過疎化、高齢化(38%)が進んでいる。

主な産業は農林業だが、地形的条件から水田、畑等の農地が少なく、1戸当たりの水田経営面積は3a程度で、10a未満の水田が村内のいたるところに棚田として点在している。その中でも「松谷棚田」と「鬼ノ口棚田」は、景観の美しさから日本棚田百選に選ばれている。

水田のほとんどが棚田

山岳地帯にある球磨村では、その谷間に球磨川の支流が流れ、それを利用して水田が拓かれてきた。山間地域であるから山や丘の斜面を造成しなければ水田は造れなかつた。石を積み上げ石垣を作り、石が少ない場所では「土壁」で棚田を造つた。水田に水を引くために川に堰を作り、また溜池を作り、水路を造つた。水路の代表的なものでは「毎床溝」がある。毎床溝の歴史は古く、今から約260年も前の江戸時代にさかのぼる。毎床溝は、川の上流4kmから水を引き、水路の総延長は約8kmを有する。このほか、数kmの

水路を造るため溝を掘り、岩をくりぬき水田を拓いた。整然と並んだ石垣や、縱横に流れる水路を眺めたとき、水田を拓く苦労と先人たちの思いが伝わってくる。

今もなお、春には田を起こし、初夏には水を張り田植えをする。秋には黄金に実った稲穂が頭をたれ、稲刈りが始まり、かけ干しが行われる。こうした「コメを作る一連の流れが、作業の機械化はされたものの数百年もの間、引き継がれてきた。

棚田を守りたい

こうして築かれてきた棚田も、「コメの生産調整がはじまり、高齢化や少子化で担い手がなく、さらには鳥獣被害により生産意欲が低下し、水田の遊休化、耕作放棄化が進んできた。石垣は草に埋もれ、水田には木が生い茂り、害獣の住処になりつつある。江戸時代の人々が、「コメを作りた

い」その思いで造り上げてきた棚田も、時代の流れや人々の生活のリズムで、その価値観が薄れつつある。しかし、水田を拓くために造られた美しい石垣や水路など、田舎の原風景を今に残す文化的景観として、棚田は博物館の展示品に値する高い文化的財産価値を有している。

その文化的景観の棚田を後世に残すために、「棚田を守りたい」という気持ちを持ち、その対策を進める必要がある。こうして生まれたのが「ムラまるごと棚田博物館事業」であり、これまで、棚田の調査や保全を行う「棚田」「一デイナート事業」、耕作放棄された棚田を解消する棚田応援隊事業を進めてきた。その他、中山間地域等直接支払制度に取り組み現在5集落が参加し、球磨村棚田保存会が結成されて、花いっぱい運動を実施するなど効果も生まれ始めた。

棚田を22世紀の子どもたちへ

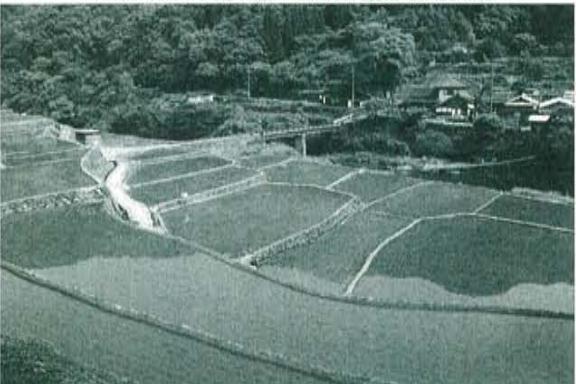
村内には、日本棚田百選に劣らない美しい景観を有する棚田も多い。その棚田すべてを博物館として、多くの人に見ていただき、棚田が博物館の展示品に値する高い文化的財産価値や、先人たちの「コメを作る思い」、そしてその歴史と美しい棚田を今も守っている人がいることを知つてもらいたい。

そこで、先人の営みが創ったムラの原風景を残す文化遺産の棚田を紹介した冊子「球磨村の棚田22選～ムラまるごと博物館物語～」(A5、65ページ、オールカラー)を作成した。未来を背負う22世紀の子どもたちに伝えたい。

村が直接棚田を守ることは難しいが、「ムラまるごと棚田博物館事業」は、その思いをたくさんの人々が感じ、「コメを作り続けている人々の思いを後世に引き継いでいかなければ」と考える。棚田の維持と保全には、守り続ける人の誇りと、それを応援する多くの力が必要だと思う。



村中が棚田だといつてもいい球磨村。写真は松舟の棚田



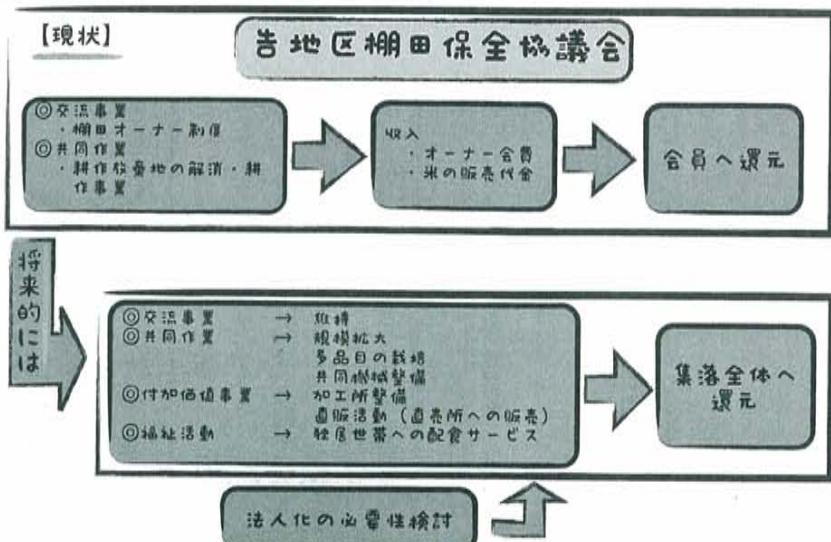
日隈の棚田



棚田応援隊事業では、県の雇用事業を活用し、草払い等を行った



告地区の今後の展開イメージ



告地区が目指す地域づくり

熊本県芦北町企画財政課
まちづくり推進係

橋口卓矢

たった16戸の告地区。平成12年から棚田オーナー制度に取り組む。その裏には、自分たちが目指すイメージがはつきりとある。

芦北町は、熊本県南部に位置し、海と山に囲まれた風光明媚な地域です。平地は、海岸及び河川流域に分布するのみで、町総面積の約80%を山林が占めています。告地区は球磨川沿いの山間部に位置し、戸時代から変わらない風景を保っている16戸の小さな集落です。近年では少子高齢化や、若年層の流出が進み、人口の減少が深刻な問題となっていました。耕作放棄地が増え、告地区的活気が少しがれています。

しそつ衰えていく中、「自分たちに何かできることはないだろうか」という地元住民の思いから、平成12年度より棚田オーナー制度が始まりました。

この制度は、農業体験をしたいという都市部の人々に棚田を提供し、田植え、草取り、稲刈り作業を通して告地区的棚田を守り、交流を深めていくというものです。

作業の後は地元住民宅を開放し、地区の奥様方が腕によりをかけて準備した田舎料理で参加者をもてなす懇親会が開かれ、作業以上に盛り上がりを見せています。

一切外注せず地域住民全體で本制度に取り組んだ結果、オーナーから口コミで広まり、今年度のオーナー数は過去最高の25組に達しました。6月の田植え祭りはオーナーの家族やお友だちも含めて65名の参加となり、特に子どもたちの元気な姿が目立ちました。オーナー制度の中心メンバーである告下豊吉さん（60歳）が「普段は告地区の中ばかりで生活しているので、参加者の趣味の話を聞くだけでもとても新鮮ですよ」と笑顔で話すように、他市町村在住のオーナーとの交流が地域住民の良い刺激になっています。

また、棚田オーナー制度と合わせて、平成22年度より耕作放棄地有効活用の取り組みも始められました。告地区住民で、荒れ放題になっていた耕作放棄地を再び耕し、地区の畑として整備しました。整備された畑は地域住民の手で管理されおり、地域住民の交流の場として利用され、高齢者の働く場所づくりにも役立つ

「地域住民みんなで管理をすることで、一人暮らしの高齢者が家に引きこもりがちになるのも防げるし、この取り組みが少しでも地域に役立てられれば」と、話すのは棚田保全協議会代表の告本正継さん（66歳）。畑では高齢の住民を中心、和気あいあいと作業をする姿が見られました。昨年は、棚田米を原料とした告地区オリジナル焼酎「どんどん告」の完成を皮切りに、菊芋、葉わさびなどの新しい作物栽培に取り組み、新たな特産品づくりにも力を入れています。

しかし、高収益の商品作物が試験段階であり、作物の収量も多くはないとため、収益力の点ではまだ課題が残っています。そういった課題を克服するために、告地区は「棚田を中心としたふれあいのコミュニティづくり」「補助金に頼らない独立した地域づくり」の2つの柱を中心と



耕作放棄地の解消、そして交流。それらを希望し、棚田オーナー制度に取り組んだ告地区。オーナー制度はいまや、焼酎「どんどん告」も作るなど、新たな活動を生み出す源に

した地域づくりを目指しています。現在の棚田オーナー制度、耕作放棄地有効活用の取り組みを継続して行い、都市部の方や子どもなどの若年層と、高齢者のふれあいの場をさらに拡大して地域の活性化を図ります。また、地域の畑で採れた作物もそのまま販売するではなく、漬物や煮つけなどに加工して付加価値をつけることで、収益の高い告地区オリジナル商品を作ると、いつ活動も行われています。「地域づくりは一部の人の活動だけでは成り立ちません。いきなり大きなことをやるうとしてもなかなか続きませんから、自分たちにもできるような小さなことを続けてきたんです。だから長い間地域全体で取り組みができるといいんですよ。これからも小さなことを少しずつ積み上げていきたいですね」

そう話す告本さんの目には地域づくりへの熱い想いが溢れています。

吉賀町がこだわり続けている有機農業

島根県吉賀町柿木村

NPO法人 ゆうきびと会長 福原压实

旧柿木村では、30年以上前から有機農業にこだわり続けてきた。消費者と生産者の顔の見える関係作りを求めて、それが棚田オーナー制度へとつながり、農家とオーナー、1対1の関係が築かれている。こうした経験を経て、見えてくるビジョンは何であろうか。

島根県鹿足郡の旧柿木村では、高度経済成長に伴う過疎化に直面するなか、第一次オイルショックを契機に、自給を優先した食べものづくりこそ山村の豊かさであると提案し、村を挙げて有機農業運動に取り組んできた。2005年10月に旧柿木村と旧六日市町が合併して吉賀町となつてからも、この有機農業運動を継承して現在に至っている。

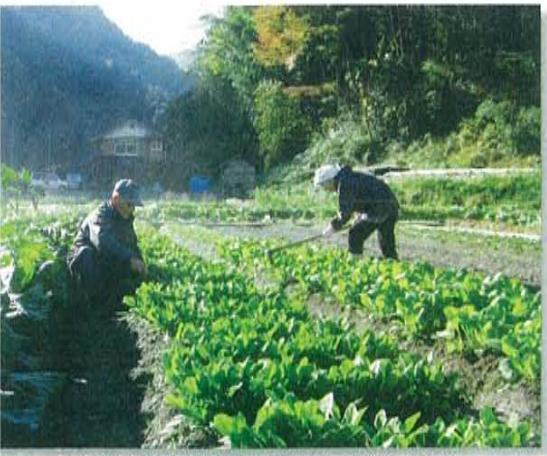
柿木村と旧六日市町が合併して吉賀町となってからも、この有機農業運動を継承して現在に至っている。柿木村と旧六日市町が合併して吉賀町となつてからも、この有機農業運動を継承して現在に至っている。

できず、質素な暮らしへの見直しが求められている。意識改革により暮らしの見直しを実現するためには、棚田を活用しながら学び、山村での「本来あるべき農業の仕方や食べ方、暮らし方」を追及しなければならない。

1960年代以降の高度経済成長は、我々に物質的な豊かさと便利さをもたらしてくれたが、一方では公害といわれる自然破壊や健康破壊をもたらした。農業基本法以降の機械化による選択的拡大政策により、山村の自給的農業はその姿を一変し、増産や省力の面においては著しい成果を挙げたが、山間地農業に明るい展望を持つことはできなかった。

私たちには再び、自給を優先した食べものづくりこそ山村の豊かさであると提案し、有機農業による自給運動を始めた。1980年に山口県岩国市の消費者グループとの交流が始められ、集落共同体としての「ムラ」は崩壊し、集落は消滅してしまう。吉賀町農業が目指す方向は、将来にわたって安定的な暮らしを維持し、他産業に波及効果を及ぼしていくような農業を確立していくことである。

このからの10年、集落が直面する最大の課題は、今まで集落を支えてきた世代が逆に「支えられる」立場へと大きく移行するという状況である。このような転換期にある現在、今後10年と、さらにその後を見通してどのような取り組みが必要か、集落の内外、都市に住む後継者も含めて集落点検することが求められる。私たちが今後取り組まなければならることは、経済や利便性を優先した都市的な生活の追及を見直し、自然や人と共生による自給的暮らしの豊かさを実現させるための新しいまちづくりである。



柿木村有機農業研究会会員（生産者）の有機栽培風景



柿木村有機農業研究会会員（消費者）への配達風景（毎週1回配達）
写真は山口県周南市の消費者グループ



消費者との交流会風景。農家のほ場へ親子による作業体験



広島県廿日市市にある柿木村のアンテナショップ「かきのき村」。
平成15年4月オープン

会長に就任します

徳島県上勝町長

笠松 和市



平成24年度全国棚田(千枚田)連絡協議会の会長という大役を仰せつかりました。1年間皆様のご支援、ご協力を賜りながら会の運営に当たつてまいりたいと思いますのでよろしくお願ひいたします。

日本農業の原点ともいえる棚田の危機は深刻さを増しています。今一度、棚田が持つ多くの機能を農業だけの問題ととらえず、景観・食料生産・多様な動植物の生存の場、エネルギー問題等、精神的な心の故郷などマクロの観点から重要視していかなくてはなりません。このことを肝に銘じ皆様と共に行動してまいります。

さて、昨年10月28日・29日の両日、「緑の階段～みんなで守ろう日本の棚田サミット」をメインテーマに当町で開催されました。「第17回全国棚田(千枚田)サミット」には、全国各地から多くの皆様が来られました。これもひとえに、前会長齋藤松崎町長様はじめ多くの皆様のご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。人口2000人足らずの、四国でも最も小さな町に全国各地から多くの皆様をお迎えするにあたり、会場や交通、おもてなしなど心配な点もありました。しかし、上勝らしい小さくても心に残るサミットにしようと、小・中学校、各種団体、ボランティアなど子どもから大人まで力を合わせて、皆が「熱意」をもつて大会を開催できることを、誠に嬉しく思っております。

今年の「第18回全国棚田(千枚田)サミット」は、10月19日・20日の2日間、「子どもたちへ残そう地域の宝～地域が育み続ける棚田の文化と景観」をテーマとして熊本県山都町で開催されます。

山都町は、江戸時代中期から始まつたとされる旧矢部町の「八朔祭」、昭和58年から開催されている旧清和町の「文楽の里まつり」、300年以上続く歴史ある旧蘇陽町の「火伏地蔵祭」を町の三大祭りとして位置づけた取り組みをされており、多くの観光客が訪れています。

また嘉永7年に築造された石組みの水路橋である「通潤橋」が有名で、平成22年に国の重要文化的景観に選定された「通潤用水と白糸台地の棚田景観(矢部地区)」や、平成11年度に「日本棚田百選」に選定された「菅棚田」と「峰棚田」など多くの棚田を有しております。サミットでの情報交換や交流を通じて、棚田の保全活動がより一層推進されることを願っております。

終わりに、当協議会のさらなる発展と会員の皆様のご健勝、ご活躍を祈念いたしまして、会長就任のご挨拶とさせていただきます。

会長を退任します

静岡県松崎町長

齋藤 文彦



平成23年度に全国棚田(千枚田)連絡協議会の会長を仰せつかり、微力ながらその任を務めさせていたしました。1年間会員の皆さまには、ご支援、ご協力を賜り、紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

昨年を振り返りますと、3月に発生した東日本大震災や

翌日の長野県北部地震、9月の台風12号が各地に未曾有の事態を引き起こし、会員皆さまの棚田にも大きな被害を与える大変な一年となりましたが、ぜひとも早期復興がなりますよう心よりお祈りいたします。

さて、昨年の第17回全国棚田(千枚田)サミットは、「緑の階段～みんなで守ろう日本の棚田」をテーマに、徳島県上勝町で開催されました。四国で一番小さな町での開催で、計り知れぬ程のご苦労があつたことと思いますが、持続可能な地域社会を目指す上勝町ならではの、さまざまな取り組みやテーマを設定した非常に素晴らしいサミットであつたと思います。笠松町長様をはじめ実行委員会、関係者の皆さまには、あらためて御礼申し上げます。

本協議会は平成7年に設立され、17年が経過しましたが、サミットなどを通じて、棚田が将来にわたって残すべき日本の宝であることを全国に訴え、活動してまいりました。少子高齢化や担い手不足など全国の棚田を取り巻く環境は厳しいものがありますが、これまでの活動を通して棚田を有する中山間地域に対する認識も深まり、各地域で棚田保全に向けた取り組みも進められております。

今後も会員がより一層連携して棚田保全、地域の活性化を図つていかなければなりませんので、さらなるご支援をお願いいたします。

最後になりましたが、中山間地域の発展のためご尽力いただいております農林水産省はじめ県、関係機関の皆さまに心より感謝申し上げますとともに、熊本県山都町で10月に開催される第18回全国棚田(千枚田)サミットの盛会を祈念し、退任の挨拶とさせていただきます。

あの日から一年が過ぎ

福島県いわき市 佐藤 守利(個人正会員)

未曾有の東日本大震災、そしてフクシマの原発事故から一年が過ぎた。

「いわき市」は、約30キロ南に位置する。人口約34万人であつたが、原発事故後、市外や県外に避難した人が約8000人。福島原発事故の地元であつた大熊町・双葉町・富岡町・楢葉町といつた小さな町から、いわき市内に避難してきた人が約2万人。

いわき市では3・11の津波で300人を超える人が亡くなつた。今も30人を超える方々が行方が不明のままで……。遺族は今年の3月のお彼岸で、行方不明事態と聞いている。

原発事故の30キロ圏内の人たちと津波で家を失くした人々は、3月11日の夜からいわき市内の体育館で、寒さと餓えと不安の日々を過ごした。その後、「仮設住宅」が建てられ、移り住んだが、冬の寒さ、夏の暑さ、隣同士の音に悩みながら皆、頑張っている。



のまま「死亡届け」を出す方もいると仄聞する。

津波にあつた家々の瓦礫は撤去され、土台だけが残り、そこ

に平凡な暮らしがあった跡を偲特にパチンコ店の盛況は異常な

去され、土台だけが残り、そこ

に平凡な暮らしがあった跡を偲ばせている。



写真右上2点：いわき市には30カ所に3000戸を超える仮設住宅が建っています。いわき市民の被災者だけではなく、福島第一原発の事故により、避難している方も多く入居しています。それでも足りず、今もなお建設中です。

ほか写真：津波で発生した瓦礫も片付けを終え、跡地は家土台が残るだけとなりました。瓦礫は市内数カ所に集められています。

株式会社 相馬屋（佐藤守利） 福島県いわき市小名浜大原字東田33番地1 TEL：0246-73-0078
FAX：0246-73-3100 HP <http://www.soumaya.biz>

米穀店を営む私の会社は、フクシマを捨て県外に移住するために退職した5人に代わって、今年の春に高卒・大卒合わせて、6人の男女が入社した。

いわき市内に住む人々も、「フクシマの米は食べたくない」と聞く。米を作っている農家の方まで、自分の作った米は農協に出荷して、自分で食べる米は、私のお店に北海道・北陸・四国のお店に買入くる人もいる。

福島県外のお客様はどうう声が多い。また、北海道や四国の中でも「福島県で精米した米を買入する人は、放射能が入っているような気がする」

福島県産米は、絶対に嫌、「東北・関東の米は危険」と言ふ声が多い。また、北海道や四国の中でも「福島県で精米した米を買入する人は、放射能が入っているような気がする」

間もなく私の会社に、米の放射性物質を測定する2000万円超の機械が入る。風評被害という差別はまだ続くなつた。騙された」という苦情から、取引中止になつた量販店もある。

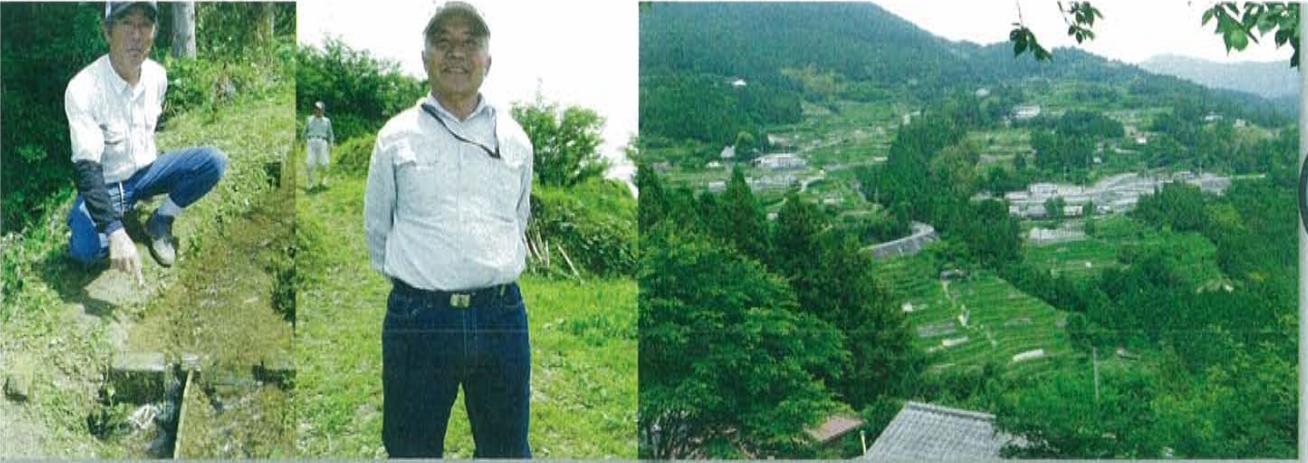
間もなく私の会社に、米の放射性物質を測定する2000万円超の機械が入る。風評被害という差別はまだ続くなつた。以上は続くと私は思つていて、マスコミの誤った報道と、一部無知な消費者のデマがある限り、

活性化のきっかけを探る

和歌山県
有田川町

沼地区を訪ねて

取材・文：石井里津子



分水工の前で、松田壽夫さん

区長の中川さん。「ここはすねで鼻をかむようなところ」と話していた

沼地区は、山々に囲まれた標高300～600mにある集落

なかでも旧清水町には、至るとここに棚田が点在している。だが、その存在や価値が声高に叫ばれることはなかつた。今回、そんな棚田地域の一つ、沼地区を訪ねた。

江戸中期の「沼村の水分け」
約30町歩。まさに耕して天に至る光景がこの地に広がっていたころの耕作面積である（表紙写真参考）。昭和28年の大洪水を機に、沼地区の棚田面積は減少の一途をたどってきた。

現在、棚田は約8ha。30haあった棚田の多くは、平成に入つた頃から山椒畑に変わつていつたほか、便の悪い場所は放棄が進んできた。

沼の棚田は、標高869mの堂鳴海山を背にし、南向きの急斜面一帯が広範囲に拓かれており、慶長検地（1601年、紀伊國検地）では、「村高參百十二石余」と記されている。つまり、戦国の世すでに780俵以上取れていた地域なのである。

和歌山県有田川町といえ、扇形をした稀有な美しさを誇るあらぎ島が有名だ。だが、町内には紀州のダイナミックな地形を巧みに利用した棚田や、棚田を転用した畑、そして急勾配に張り付くようないかん畑など、心揺さぶられる光景が随所に広がっている。

和歌山県有田川町といえ、扇

形をした稀有な美しさを誇るあら

ぎ島が有名だ。

だが、町内に

は紀州のダイナミックな地形を巧

みに利用した棚田や、棚田を転用

した畑、そして急勾配に張り付く

ようないかん畑など、心揺さぶら

れる光景が随所に広がっている。

なかでも旧清水町には、至ると

ここに棚田が点在している。だが、

その存在や価値が声高に叫ばれる

ことはなかつた。今回、そんな棚

田地域の一つ、沼地区を訪ねた。

沼の棚田の基本水利は、2本の谷水である。「宮本谷川」と「本田谷川（西の谷川）」。かつては山の上の方にある神出池からの水利用もあつた。だが、何しろ田が多く、水不足は常につきまと、水喧嘩が耐えなかつたという。

それを1781（天明元）年に沼外記石衛門が、谷川から横へと水を引き入れる溝を40ほど完成させ、公平な「水分け」を徹底させたのである。ちなみにその頃の人口記録は1724（享保9）年で73戸486人である。周知せることにも苦労があつたはずだ。

溝ごとに「溝親」があり、「溝帳」には、一つ一つの分水工の高さや幅まで厳密に記載されている。現在もこの「溝帳」に従い、当時の分水規定のまま水は配分され、木製のものを鉄製に変えたりしている。

沼は、南向きで技術力もあつたから、年貢を納めるにしても生産高も高くて、昔から一等田、上田だった。なのに、今はもう、ここ

だけに今、こここの棚田を守つて行くには「力を合わせられる人数が限られている」と目の前に立ちはかかる不安を抱えていた。

ここは「大江溝」。大江溝の本

流から松田さんの6a、7枚ほど

の棚田へ分水するためのものだ。

記石衛門の労によるものだ。

が敷かれたのである。庄屋、沼外記石衛門の労によるものだ。

が台帳を持つていて、改修するに

も溝普請するにも、その台帳に從

つてやる。分水もうまく考えられ

ていて、ふき水（湧き水）がある

ところは、その水を使うよう指示

されてたり、細かく定められて

いるなあ。溝親はその溝の末端の

人がやつてている。その人が一番、水が来ないと困るでしょう。持ち

回りではなくて代々、その家で引

き継いでいくものだね

と教えてくれた。

「沼は、南向きで技術力もあつたから、年貢を納めるにしても生産高も高くて、昔から一等田、上田だった。なのに、今はもう、ここ

だけに今、こここの棚田を守つて行くには「力を合わせられる人数が限られている」と目の前に立ちはかかる不安を抱えていた。

松田さんはJAに勤めていたと

だけに今、こここの棚田を守つて行くには「力を合わせられる人数が限られている」と目の前に立ちはかかる不安を抱えていた。

岡本さんの奥さん、しづ子さん

棚田と山椒農家の岡本和郎（かずよし）さん

役場の中谷さんは、「ここはヘビがカエルを飲み込んだような棚田」だと自分のところの棚田を指して笑う



岡本さんの奥さん、しづ子さん

棚田と山椒農家の岡本和郎（かずよし）さん



山椒採りは、男性も女性も行うとか。奥が中川区長の奥さん、米子さん、そして手前が中川佐知子さん



山に囲まれ、小さな畠たちが懸命に斜面に張り付いているかのよう



今も使われる分水工。分水規定の定めは宝暦年中(1748~1764)に作られたという

沼に新たな風が吹き始めた

現在48戸が暮らす。昭和50年は75戸あった。人口で見ると272人から85人となり、約7割減だ。子どもはない。子どもの通学や教育環境を考えると、同じ旧清水町内でも、子どもが多い中心部へと出ざるを得ない。それでも耕作を続けるため、沼に通つ人もいる。

有田川町清水行政局産業振興室の中谷芳尚さん(44)もそんな1人だ。

「うちも親父やお袋が沼でがんばっているから、帰つてその手伝いをしている状況ですよ。僕だけになつたら、守つていけるかどうかわからぬのが本音です」

たつた1人の心意気や意地だけで、急峻な棚田は守れないことを、広大な棚田の中で育ち荒れてゆく光景も見てきただけに躊躇が知つていて。その等身大の答えが現実だつた。

そんな沼に最近、ある風が吹き始めた。2011年、1年かけて和歌山大学の学生たちが沼の耕作放棄地を耕し、そばを植え収穫したのだ。「棚田ふあむ」と名付けられたその有志の集まりは12人。県農業農村整備課が大学に相談し、地区の田植え休みに合わせ、沼のみなさんと和歌山大学生合同のそば打ち交流会が開かれた。区長の中川雅弘さん(77)は話す。

「最近は、自分らだけでも寄ることがなくなってきた、こういうきっかけがあると言えます。みんな楽しみでしょう。地区内でも交流がなくなってきてますから」

実は、昨年6回も通つて来ていたのだが、地元との交流の機会は設けられていなかつた。取材でお会いした地元の女性たちが口をそろえて言つ。

「遠くから見て、ほんまは声かけしたかつたわ。学生さんたちが来てくれて。でも、声かけていいのかわからんで。だから、今回一緒にそば打つて、楽しかつたあと」

「もち投げ」が盛んな地域で沼で話を聞き進めていくと、地区内の交流が減つてきたとはいへ、祭りなどの地域文化は数多く残り、祭りのたびに「もち投げ」を楽しむこともわかつてきつた。整理してみると、なんと1年に8回も「もち投げ」行事があつた。そのうち地蔵祭り、愛宕神社祭り、祇園神社祭りは2箇所で行つたため、地区内だけで累計11回のもち投げが行われてゐることになる。

そして、最も大きな祭りである白山神社の秋祭りでは、昭和30年頃までは、若い衆が神社まで大きな餅を入れた半切り桶を担いで奉納していたという。しかも、行く手を阻む衆もいて喧嘩騒ぎで山を登り、活氣溢れる祭りだつたそうだ。それが、今では鳥居もぐぐらず、軽トラックで横付けし奉納する。「交流つて、話すだけでもれしくなる。人と話すと心から元気にな



写真右：耕作放棄地の草刈りに挑んだ「棚田ふあむ」のメンバー。後列右から4番目が、担当教官の観光学部地域再生学科 大浦由美准教授

写真左：6月9日に行われたそば打ち交流会。学生と沼地区的参加者で打つそばに、地元の野草などの天ぷらも振る舞われた（いずれも写真提供：和歌山県）

「最近は、自分らだけでも寄ることがなくなってきた、こういうきっかけがあると言えます。みんな楽しみでしょう。地区内でも交流がなくなってきてますから」

「もうやめますね。一緒にやってくれるんやつたらそんなええことない」

おそるおそるたずねると、すぐに答えたが返つてきた。

「そりええですね。一緒にやつてくれば、迷投げをするのは、ありがた迷惑?――

感?――

「最近は、自分らだけでも寄ることがなくなってきた、自分たちができることも工夫していきたい」

学生との交流や、来年度有田川町開催の全国棚田サミットを前に、活性化への追い風が吹いてきた。

農村と里山の文化を未来につなげるために、今私たちができること
（兵庫県での棚田サミット開催を目指して）

NPO法人 棚田LOVER's 永菅裕一(個人正会員)

○NPO法人 棚田LOVER's

たなだりばーずの活動

NPO法人棚田LOVER'sは「美しい棚田を将来につなげたい！」、

「棚田を愛し、棚田を育む、未来の子どもたちのために」という思いのもと、2007年5月に立ち上がった団体で、(2010年3月法人格取得)兵庫県を中心に棚田の保全活動を行っています。

(写真下段・稲刈り(9月)収穫祭
(11月)、棚田米の試食会、有機農業講座、農楽カフェ(農や食について語り合う交流会)、コンサート、貸し農園の運営、菜

兵庫県佐用郡佐用町田和地域の石垣の棚田

○数多くのゲストとともに
意見交換

フォーラムでは、基調講演を



スクリプト作成 | フラグメント

一九

重要。足るを知る」とも大切。【食グループ】[メッセージ..みんなで守ろう!] いのちのもと

【農グループ】[メツセージ]　心のふる里　美しい棚田　未来につなごう「文化遺産】

3グルーブでは下記のような意見が出され、グルーブごとに今私たちができることのメッセージを考

○今私たちができること
生たちに先進事例の紹介をしていただきました。

ボーラーの福井正春氏に、活動のグループでは、奈良県から寄せられた健一自然農園への越しいただいた伊川健一氏、関西国際大学の学

法國際研究開発センター研究部
育種課の巴清輔氏に、食のグリル
ープではなくすのき農園の伊藤庭
理子氏、兵庫県の小規模集落サ

○兵庫県での棚田
開催を目指して

今回のフォーラムを契機に将来的には、兵庫県での棚田サミット開催を目指して、食の安心安全・命の大切さ・地域の素晴らしさを伝え、想いをもつた作り手とファンの拡大、棚田の保全・復興を目指していきます。ご興味のある方は090-2359-1831かtanadalove@yahoo.co.jpまでやせり連絡下さい。HP: <http://tanadalove.com/> もご覧ください。



田植え体験の様子

「個人会員の会活動費補助金」は、個人会員がかかわりを持つ棚田保全活動の中から、良質な活動を応援するために、全国棚田（千枚田）連絡協議会が予算化しているものです。上記報告は平成23年度個人会員の会活動費補助金が活用されています。次号でも引き続き、平成23年度の報告を掲載予定です。

事務局 ニュース

事務局、徳島県上勝町
からのお知らせコーナー
です。

平成24年度全国棚田（千枚田）連絡協議会の事務局を務めることとなりました徳島県上勝町です。1年間どうぞよろしくお願いいたします。

昨年10月28日・29日に当町で開催いたしました「第17回全国棚田（千枚田）サミット」には、全国各地よりたくさんの方にお越しいただきました。誠にありがとうございました。

会員の皆様はじめご来賓、一般参加者、関係機関の皆様に格別なるご支援・ご協力を賜りましたこと、何より地元の皆様の多大なるご協力をいただきまして、サミット実施へとこぎつけることができましたこと、紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、昨年実施した第17回全国棚田（千枚田）サミットの開会式の折、サミット実行委員会会長のあいさつの中で「嘗々と築き上げてきた棚田が、10数年後には後継者がいなくて消えてしまうのではないか」という心配があり、本町のみならず日本各地で同じような状況に置かれている」ということが述べられました。また首長会議においても「担い手の育成」というテーマで議論が交わされました。「後継者の確保育成」というのは

セクター「株式会社いろどり」による緊急人材育成・就職支援事業求職者支援訓練が昨年度実施され、その訓練受講者18名の内、受講期間終了後本町に10名の受講者が残り、その10名の内6名が本町で実際に農業に携わるようになりました。

この流れを大事にして、新しい活力として地域に根付いてほしい、その流れの中で少しでも棚田保全に携わる人が増えてほしいと思っています。

新しい力と地元でこれまで棚田を守ってきた力とが恵を出し合いつながら、一つひとつ取り組みを積み重ねることにより、棚田を守り、将来に引き継いでいくことができれば大変嬉しいと思います。

そして、今年の「第18回全国棚田（千枚田）サミット」は、「子どもたちへ残そう地域の宝～地域が育み続ける棚田の文化と景観～」をメインテーマに、熊本県山都町で開催されます。現在町実行委員会が10月19日・20日の開催に向け、着々と準備を進めていただいていることになります。非常に有意義なすばらしいサミットになることを心待ちにしています。

「風かおる文楽と石橋の郷 山都町（星と森、そして水が生まれる里）」山都町で皆様にお会いできることを楽しみにしております。

会員皆様の大勢のご参加をお願いします。

Topics

竜巻による被害、栃木県茂木町から

茂木町農林課課長補佐

山田眞一



去る5月6日、茨城県つくば市をはじめ栃木県南東部を襲った竜巻や突風、ひょうなどにより私共の茂木町でも少なからず被害を受け、協議会の皆様には大変ご心配をおかけしました。今回の竜巻は、市街地近郊を短時間で通り過ぎていったため、一般住宅では約20軒の一部損壊が発生しました。一方、農業関係の被害では、マスコミ報道よりも損害は少なく、作物や施設関係合わせても約250万円で済んだことは、ある意味不

幸中の幸いだったと思います。同じ罹災した近隣の真岡市や益子町では、ハウスでの施設園芸が盛んなことから、大きな打撃を受けた

震災、そして福島第一原発の放射能漏れ事故と経済的にも精神的にも大きなダメージを受けてきました。今でも一部の農林産物において出荷制限がかかっており、道の駅をはじめとする各直売所では

風評被害により野菜の売上げが落ち込んでいます。

しかし、町民の皆さんは毎年二重三重の災害に見舞われても、明るく元気に振る舞つて下さり、オーナー制などの都市農村交流事業も頑張って積極的に活動しています。かつて流行ったZARDの「負けないで」の曲に乗りながら、常に新しい視点で、あたたかいまちづくりを着実に進めて参ります。

全国の皆さん、どうぞ今後ともよろしくお願い致します。

編集後記

今年も豪雨などの災害が日本各地を襲い、本当に災害の多い国であることを実感する近年であります。みなさまの地域はご無事でしょうか。まだまだ災害や復旧のまっただ中にいて、ふんばっていらっしゃる方々も多いことと存じます。そんなお一人、本協議会個人正会員の佐藤守利さんが、福島県いわき市でお米問屋を必死に継続して営む中、現状を寄せてくださいました(p11)。ありがとうございました。また、震災後、崩れていた新潟県十日町市の留守原の棚田が復活し、都府住民に呼びかけての田植え・草刈り情報も㈱東京農業サービス池田徹さんからいただいています。「棚田ライステラス」は年3回の機関紙で即効性には欠けますが、じっくりと全国各地の情報を伝えたいと思います。今年度もよろしくお願いします。石井里津子

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織
全国棚田（千枚田）連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

徳島県上勝町 産業課

〒771-4501 徳島県勝浦郡上勝町大字福原字下横畠3番地
TEL: 0885-46-0111
FAX: 0885-46-0323

協議会HP:<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

新しく会員になったみなさま

<団体正会員> 東京都 (株)むらせ

<個人正会員> 東京都 宇都木丈夫

長野県 高橋 正宏

兵庫県 永吉 裕一

既存の砂防ダムを利用した自治体による水力発電



砂になった砂防ダムの堰横に設けられた取水口。この発電所の総事業費は2億8000万円

熊本県山都町(旧清和村)にある清和水力発電所を訪ねた。車で山道を奥へと進み、緑川の上流へと向かう。辿り着いたのは満砂となった砂防ダム。それが堰の役目を果たし、脇から約300m導水したのち、約14m下の水車を回し電気を作る。

清和水力発電所は旧清和村が計画・建設したもの。町村合併後に山都町となったのち、平成17年4月に稼働はじめた。年間発電量は平均約87.4万kwh。一般的な家庭(4人家族)の200世帯分に相当する。ちなみに火力発電に比べ、CO₂は約500トン減だという。

計画時からの担当者、山都町清和総合支所総務住民課の木野貴之さんに案内してもらった。木野さんは、日常管理を委託するまでの3年間、たった1人で寒い日も暑い日もほぼ毎日、発電所へと足を運び、腰までどっぷりと水に浸かりながら、取水口に詰まった落ち葉や枯れ枝、ゴミなどを取り除いてきた。発電量を落とさないためだ。

「自治体からの視察も多いのですが、現在のところ、経済的メリットを重視するならば、ノウハウを持った電力会社を誘致した方が良いのではないか」と話をしていますね」

と、思いがあるだけに、冷静に状況を見つめてもいる。

ここで作られた電気はすべて売電している。その額、平均して約1000万円/年。だが、維持経費等で年間約240万円かかるほか、1500万円/年という建設事業費の償還(H32年完済予定)もある。

最近まで“電力業界”的土俵の上で、小水力が生み出す電気に高値は付かなかった。実績を見ると、水力発電の売電価格は8~13円/kwh。ちなみに太陽光発電は40~42円。これでも平成15年に施行されたRPS法(電気事業者による新エネルギー等の利用に関する特別措置法)。今年、再生可能エネルギーの固定価格買取制度導入で廃止)による後押しがあったがゆえ、平成17年当時、電力会社と直接交渉し、15年間一定のレベルを保つ契約を結んできた。

もちろん計画当初は自家消費を考えていた。だが、そのためには、さらに数千万円の投資が必要だった。旧清和村の伝統芸能である文楽を保存継承する「清和文楽館」(年間10万人以上来館)に使用し、子どもたちの環境学習に役立てる青写真も描けた。

しかし現実には、距離があるため送電はむずかしく、また夜間に起こした電力の使い道がなかった。

だが今後、山都町をはじめ農山村はクリーンなエネルギーを生み出す場として、注目されていくだろう。そこから、都市住民たちが農山村が生み出すエネルギーの直接的な買い手として参画できる仕組みも作っていくかも知れない。

そして、この7月「再生可能エネルギー固定価格買取制度」がスタートした。これは電力会社に対し、太陽光や風力、地熱、水力といった再生可能エネルギーを一定期間・固定価格で買い取ることを義務づけたものだ。これが既存のものにも適用されることになり、約28円の売電価格が見込まれている。今後ますます農山村が生むエネルギーの真価を広く伝えていくことも必要だろう。



写真是担当の木野貴之さん。かつては取水口のメンテナンスを行うにも、道や階段も整備されず、急な斜面を上り下りするのに、1本のロープを使っていたとか



取水口のゴミは人力で取ったのち、除塵機でも取り除かれる



建屋の建築材は、すべて地元産。山小屋風で洒落ていた



かつては、はしごを登った
数年前に作られたという取水口への階段。結構狭く急だ。



路式の発電である。水圧鉄管(右)と余水管(左)。
水圧鉄管から発電機へと水がゆく



経費は抑える。メンテナンスのために使用する
胸まであるつなぎの長靴もつなぎはぎだらけ



一級河川緑川にある満砂となった砂防ダム(左)、右は取水口からの余水はけ

(取材・文:石井里津子)



クロスフォー水車が中に入っている。最大出力190kw。水力発電は、太陽光に比べると、16
天候に左右されにくく。稼働率は高く、50~70%